信仰と教育

——カール・バルトの思想を中心にして——

田　浦　武　雄

I　序

親しく接した人との出会いをとおして、信仰と教育との問題について学ぶ場合の他に、書物をとおして、学ぶ場合もある。私にとって、前者の場合については、前巻（名古屋柳城短大紀要第19号）で述べたが、後者の場合の例として、スイスの代表的神学者であったカール・バルト（Karl Barth　1886—1968）とアメリカの代表的教育哲学者ジョン・デューイ（John Dewey 1859—1952）をあげることができる。デューイについては、他の機会にふれたことがあるので[1)]、本論では、カール・バルトをとりあげたい。

カール・バルトは、スイスのバーゼルで1886年５月10日に生れた。父のフリッツ・バルトは神学者であった。カールが３歳の時、父はベルンに移り大学の教授となった。カール・バルトは、ベルン、ベルリン、テュービンゲン、マールブルグの各大学で学び、1909年、ジュネーブ教会の副牧師、11年アルガウ教会の牧師となった。1919年に書いた『ローマ書』は、当時のキリスト教界に一大反響をよびおこした。この書でかれは、神と人との無限の差異を強調し、人の延長線上に神がいるわけではなく、人から神に直結する道は無いと述べた。この深渕に橋を架けるものは、神の側からの啓示としてのイエス・キリストと、キリストへの信仰のみであること、神の恩寵の重要性を強調した。

1921年ゲッチンゲン大学、25年ミュンスター大学、1930年ボン大学等で教授となったが、35年に反ナチス的とみなされて追放され、バーゼル大学教授に移り、引退するまでこの大学に在職した。かれは反ナチス的教会闘争の指導者となった。32年以来大著『教会教義学』を書き始めたが、約９千ページに及ぶこの大著もかれの死により未完に終った。

II　カール・バルトの人間形成論

バルトは、1932年以来、著書『教会教義学』（Die Kirchliche Dogmatik）を分冊と

して刊行してきたが、1968年の死によって、完結していないが、私はその大著に圧倒されたものである。かれの専門は神学の領域であり、教育学の領域ではない。しかしかれの著作は、人間形成の問題に、重要な光をあて、示唆を与えるものがあることはたしかである。

まず、福音と人間形成との関連についての主張をみる場合、1938年の「福音と形成」(Evangelium und Bildung) [2] から学ぶところが大きい。この論文は、1938年9月11日、スイスのベルン近郊のムーリー教会で行われたスイス福音主義学校連盟総会での講演を、その内容としている。この論文は7節から成っている。7節それぞれの節のタイトルは示されていないが、主題というかテーゼが各節の始めに掲げられ、その説明を行っている。この手法はかれの特色の一つである。以下に掲げる各節のタイトルは、私が便宜的に掲げたものである。

1. Bildungについて

Bildungは、教養とか形成と訳すことができるが、ここでは、論文の脈絡を考えて、形成という訳語をあてた。

> Bildungとは、人間的現実存在の本来的な定めと可能性を念頭におきながら、外面的・内面的に構成していく課題を示している。Bildungの対象は人間であり、Bildungは、形づくり（Gestaltung）をも意味している。Bildungは、知識、能力、経験、意欲、運命等の範囲にとどまるのではなく、それらすべてにおいて、それらすべてと共に、形づくられることを言う。

このようにバルトは述べているが、人間形成は現実から未来への可能性を伸ばし、全人格的営みであることを指摘していることは、重要である。

次にバルトは、すべての形成においては、次の三つの問題があると言う。(1)人間の周囲の環境が、できる限り豊かに、かれが環境を理解し、それに参与することができる者へと形成するということ。(2)人間が、その周囲の世界との出会いの中で、自己自身を自由でしかも責任ある者に形成してゆくこと。(3)人間自身が、まわりの世界の中やまわりの世界に対して、形成者となるということ。これら三つのことが、形成において問題である。

バルトのこれらの表現や説明は難解であるが、第1は環境による人間形成、第2は環境との出会いの中での自己自身の形成、第3はまわりの世界に対して人が形成者となること、を意味していると言ってよい。

バルトはさらに人間形成について、次のように主張している。人間存在の形成は、上に述べた三つのことを含まないところでは、真剣にBildungについて語ることはできない。この三重の形成が、人間のBildungの課題である。

2．福音について

福音とは、教会に対して課せられたイエス・キリストについての使信である。キリストは神の子であり、神から来り、かれを信じるすべての者のためにとりなし、そのようなものとして、信ずる者のすべての希望である、唯一の形成された人間でありたまう。

このように、バルトは、福音は教会に課せられたイエス・キリストについての使信であることを強調している。

3．福音と形成との課題について

(1)　形成の可能性

形成された人間、イエス・キリストについての使信として、福音はBildungの課題の可能性、必然性、意味、範囲、解決を明らかにする。

このようにバルトは提題を述べ、その説明を行っている。その中心主張は次の点にある。福音はただ神の尊厳さについての宣べ伝えであるだけではなく、人間の形成の課題を明らかにする。イエス・キリストは「見えない神のかたち」（コロサイの信徒への手紙１：15）であられたが、「神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって、自分を無にして僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」（フィリピの信徒への手紙２：６～８）。福音は、クリスマスと復活の福音であることを示されたのである。

バルトによれば、永遠なる神の力が、人間の形成の可能性を与える。福音は人間の形成の努力と意義とを肯定する。これが福音と形成との関連の第一の構造である。

(2)　形成の遂行者への問い

イエス・キリストについての使信としての福音は、すべての人間的な形成の計画・力・企図のまことの遂行者を問う批判的な問いである。

このように、バルトは提題を述べたあと、説明を加えている。その中心主張は次の点にある。キリストにおいて、神は自らを人間にまで低め、また人間を御自身にまで高め給うたために、ここに形成がおこったのである。人間の形成はここにおいて主体をもつのである。人々は、その形成の努力において、福音によって常に審かれていることを忘れてはならない。人々はその下におかれている永遠の選びから、認識秩序（Erkenntnisordnung）という点では身をひく、すなわち認識できないでいることはあっても、存在秩序（Seinsordnung）という点では、決して身をひくこと、すなわち逃避することはできない。

このようにバルトは主張しているが、福音は常に形成に対して批判的な問を発するもの

であることを重視している。これが福音と形成との関連の第二の構造である。

(3) 自己満足の否定

イエス・キリストについての使信としての福音は、自己満足の中で、人間によって企てられるすべての形成の試みに対して逆らう。

このようにバルトは提題を述べ、説明を加えているが、その中心主張は次の点にある。キリストのヒューマニティは、人間性の発展の最後の精華（Blüte）ではない。キリストの実存は恵みであり、啓示である。人間の側からの形成努力の始めと終りを形造っているものは偶像崇拝、すなわち他の疎遠な神々に仕えることである。

このようにバルトは主張しているが、福音は、人間の側の自己満足におちいった形成の試みに抗する。これが福音と形成との関連の第三の構造である。

(4) 自己謙遜と形成

人間のために味方しつつとりなし給うイエス・キリストについての使信としての福音は、自己謙遜と即事性の中で、人間によって企てられるすべての形成の試みに、役立ち奉仕する。

このようにバルトは提題を述べているが、さらに説明をつけ加えている。その中心主張は次の点にある。キリストは、形成者及び形成された者として、神の前に人間のとりなしをし、人間のために償いをし、われわれが悪くすることをよくするという恵みを与えられていることを、みのがしてはならない。福音は、人間のために味方しつつ、とりなし給うイエス・キリストについての使信として、形成の試みに役立ち奉仕する。福音は、形成を導き、現実にする。つまり福音は、自己謙遜な人間形成の企てを可能にする。これが福音と形成との関連の第四の構造である。

(5) 形成の希望としての福音

われわれの希望であるイエス・キリストについての使信としての福音は、すべての信者の形成の、いまなお隠されている現実である。

バルトは、このような提題を述べたあと、解説を詳しく行っているが、その中心主張は次の点にある。

われわれがキリストにあって、形成し、また形成されているということは、今ここで既に現実である。「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」（コロサイの信徒への手紙３：10）を読む時、われわれの現在のことが記述されている。形成の現実には、啓示を欠いており、啓示がまだこないということが、福

音の使信の間接的性格を生じさせている。われわれが将来あるであろうと考えられることが、それとして現われていない。イエス・キリストを、われわれの希望としてうけとることによって、われわれが将来なるであろうところのものへのめあてをもつ。このことが信仰である。福音の約束と希望をもつこと、したがって、信仰とは、キリストを、われわれのために、すべてを正しくされ、これからも正しくされるであろう主として受けとることである。

バルトは、このように述べている。キリストに示される福音が形成の希望を与えるということが、福音と形成の関連の第五の構造である。

バルトの文章は、私には難解に思われたが、その内容から学ぶところは大きい。かれの重要な指摘をまとめてみよう。福音は、イエス・キリストについての使信である。イエス・キリストは、神の子であり、神から来、神の前で彼を信じるすべての者のためにとりなし、そのようなものとして、かれらすべての者の希望である。キリストは真の意味での形成された存在である。これらのことをバルトは強調している。福音と形成との関連については、先に述べた五つの構造をもっていることを明らかにした。

福音に基づき、それに支えられ、それに方向づけられて、自己満足に陥ることなく、謙虚に人間形成に努めることの重要性が指摘されている。これらの指摘を、人間のBildungにおいて、総合的に達成することは容易なことではないが、人間のBildungの重要な要素であることを確認し、実践に生かすことが大切である。

Ⅲ　職業倫理と人間形成

倫理の問題は、いつも問われているといってよいが、カール・バルトは、どのように考えているであろうか。この問題を考察するさいに役だつのは、かれの『教会教義学』の第3巻第4分冊（1951年）である。各巻の終りの部分に、倫理論が述べられているが、この第3巻が重要である[3)]。バルトの主張は、とくに次の二つの面から考察することができる。第1は、働く生活と仕事の生活との関係であり、第2は、召命と職業との関係である。

1．働く生活と仕事の生活との関係

(1)　働く生活とは何か

バルトは、働く生活と仕事の生活とを概念的に区別している。働く生活とは、神に対する服従として、神の御業への対応としての生活である。具体的に人々は、仕事をしなければ生きていけないが、働く生活の中核が仕事ではない。このことは、仕事を過少評価する

のではない。仕事は、人間の生活の中でその座をしめ、その点で価値をもっている。

中世の修道院におけるような瞑想的な生活に反対して、マルチン・ルターやＪ・カルバンのような古プロテスタンティズムの人々が、活動的生活に仕事の倫理をきずき、召命即職業労働と考えたが、この世的な仕事そのものを働く生活と同一視した点に問題点があった。バルトによれば、働く生活は、根本的に、神の恵みの行為に対する対応として存在する。この対応は、奉仕、仕えるという概念に凝集させることができる。

(2) 働く生活の中核

働く生活の中核は、バルトによれば、教会の課題達成への協力である。この考えはキリスト教の思い上りと、人々は言うかもしれない。しかし主に従って働く生活をするということは、思いあがりができるようななまやさしいものではない。またこの考えは、社会からかけはなれていると人は言うかもしれない。しかしキリスト者としての行為は、働く生活の何番目かに、ちよっと覗くというものではない。教会への奉仕こそ働く生活の頂点である。この場合の教会とは、キリスト教固有の課題をもった人々の集まりであり、制度や機構ではない。

このようにバルトは述べているが、働く生活の中核は、キリストに従うことであることを強調している。

(3) 仕事の生活と判断の基準

① 仕事の生活　仕事そのものは、人間の行為の中心ではなく、働く生活の周辺に位置する。仕事は、人間が人間として生存し、奉仕していける人間として存在するための営みである。仕事は単に自己保存のための生活手段を獲得することだけにおわるのではない。どのような仕事が正しいかどうかを判断する必要があるが、バルトは、次のような５つの規準を考えている。

② 仕事を判断する五つの規準

１）実質性の規準、これは仕事について明確な目標をもち、その達成のために最善がなされているか、ということである。

２）真価の規準　これはその仕事が意味のある尊敬すべき仕事であるかということである。しかし資本主義を含め、今日の社会では、職業の選択を自由にできない面もある。飢えるかそれともその仕事につかざるをえないかの場面もある。その責任は、場合によっては、個人よりも雇用者や国家に問われなければならない。しかし基本的には、その人の具体的状況において、神の誡めによって命ぜられている正しい仕事と禁じられている正しくない仕事との間に、限界線をひくことが必要である。

３）人間性の規準　これは人間の行為は、常に隣人と連帯的であり、その仕事において

人間らしさが問われねばならないということである。このことは、2つの注意点をよびおこす。その1つは隣人に対する配慮である。他の1つは、仕事は平和な共同という性格をもち、社会的不正と対決しなければならない。

4）　意識の規準　人間が機械化される危機に直面して、仕事の主体性が留意されなければならない。

5）限界の規準　人間の生活には自由や休息が必要である。休息は積極的には、神の前での休み、すなわち自己検討のときである。

以上、働く生活と仕事の生活との関係についてのバルトの見解を概括した。仕事の生活を働く生活の中に位置づけ、働く生活は神の恵み、すなわち人間が生きるに価しない「罪」あるものであるにもかかわらず、なお生かしたまう恵みに対応するものとして、神への奉仕という中心的なことに支えられながら、仕事の意義をみいだしていくべきであることを主張した。働く生活と仕事の生活の関係は、召命（Beruf）と職業労働との関係についてのバルトの考察で、さらに具体的になってくる。

2．召命と職業労働との関係

バルトによれば、聖書にでてくる召し（クレーシス）――例えばコリント信徒への第一の手紙の7：17――は、神の招きの行為を意味した。しかしマルチン・ルターは、召しを召命（Beruf）と訳し、職業労働と結びつけた。その理由は、神に奉仕するためには、修道院に入る必要はなく、職業労働の領域においても、神の召命があることを認め、神に服従すべき道があると考えたからである。ルターの考えは、職業労働の肯定という点で意味があるが、現実社会の枠の中で得ている職業を、神から与えられた召しと同一視し、職業における勤勉を、かれに命ぜられた召しに対する服従とみなした。職業がキリスト教的に偽装されるおそれがある。また無職業のものは無召命ということになるのではなく、召しは職業以上の概念である。召命は一定のところにとどまるのではなく、人間存在に関する必然的な自覚への方向づけと考えられるべきである。

バルトはこのように召しや召命について主張したが、召命の概念の構成要素として、①年齢、②歴史的立場、③個人的立場、④活動範囲をあげている。次にこの点にふれたい。

①年齢　人は生理的・心理的に変化する制約を負うが、あらゆる時に自己同一的な存在として、自分を新しく発見するべきである。たとえば、若さとは、よりよい人間になるべく、神によって課題として定められている存在であることに、めざめるところにある。内面における対立と矛盾を克服するところにしか、真の生成（Werden）はない。人間は常に人生行路の他ならぬこの場所で、今まさに到達した年齢において、召しを受けるのである。

②歴史的立場　各人がそれぞれもっている歴史的立場、たとえば教養・思想・時代などは、召命の外的制約を形づくっている。歴史的立場は、宿命ではなく、安易に妥協してはならないものであり、神の召しに対する準備として考えるべきである。

③個人的才能　これは召命の内的限定となる。各人はそれぞれ才能・能力をもっている。その全てをもって、召しに応えなければならない。

④活動範囲　人が選んだ活動範囲は、かれの存在の諸限定の１つにすぎず、これを絶対化してはならない。ルターの召命観の欠陥は、神の召しに従う場を、この世の既存の職業に直結したことである。

以上、バルトの召命と職業労働との関連について概観したが、職業労働は、人々がその能力を発揮し、又生活を支えるものとして意義がある。しかし、神の召し即職業労働ではなく、職業労働の絶対化を戒めている。職業労働を絶対化してはならないが、職業労働をとおして、隣人に奉仕することは大切である。自己の賜物を生かし、神に支えられながら、働く生活に励んでいくことの重要性を教えられる。

Ⅳ　バルトの所論の特色

1930年代に台頭したナチズムとその影響下で、民族や総統の中に神の啓示をみようとした民族主義的キリスト者と闘い、バルトは啓示はイエス・キリストとしてのみ与えられることを強調した。ヒトラー総統への忠誠を拒否したことによって、バルトはドイツを追放された。バルトは反ナチス的教会闘争の指導者としての役割りを果たすことになった。

バルトの大著『教会教義学』は序説、神論、創造論、和解論の各部から成り、1932年序説が刊行されて以来、長い年月をかけて各部が書かれてきたが、最後の救済論は、バルトの死によって完結されなかった。『教会教義学』は約９千ページに及んでいるが、その基本命題は、「神はご自身を主として啓示し給う」、言いかえれば、、「聖書が証しするイエス・キリストが神の啓示である」ということである。

私が『教会教義学』のうち特に注目したのは、第３巻の第４分冊（1951年）であることは前にふれたとおりである。1938年の「福音と形成」はその序曲とも言える。

バルトの人間形成論と職業倫理の考え方は、いずれも福音を媒介とし、福音に支えられ、方向づけられており、福音の射程にあるということができる。それはちようど、基地を飛びたった戦闘機が、常に基地から発するラジオ・ビーコンの電波の中にとどまって行動するのに似ていると言ってよい。

バルトは、形成の課題として、環境の構成、自己実現、教育的存在としての人間の形成

を考えていた。神は生（Leben）において力をふるい、人は自己の行為を絶対化することなく、福音の批判のもとにあることを、バルトは主張した。

働くことのできないものやユダヤ民族等の存在を価値なしとか有害なものとして否定したナチスに対決して、偶像視されている労働の相対化・周辺化を強調し、人間存在のありかたを究明した。労働は、独立的人間となる大きな要素ではあるが、労働のできない高齢者や病める人にも、かけがえのない生はある。人間形成の価値判断の尺度は、労働のみにあるのではない。しかしバルトは、働きの生活において、仕事・労働の占める重要な役割を認めており、よい仕事・労働の規準として５つのもの考えたが、そのうち第３の人間性の規準、第４の意識の規準は、資本主義の社会機構に対する批判から生まれたと言ってよい。人間性の基準では、バルトは、隣人への配慮と社会的不正との対決を強調した。意識の基準では、バルトは、人間が機械化されず、仕事の主体性が強調されており、社会の質が問われているといってよい。

バルトの人間形成論と職業労働論との関連は、福音を媒介とし、それに支えられ福音の射程において緊密に結びついており、それは現代においてめざすべきキリスト教的人間像を示したと言ってよい。しかし教育内容・方法への領域についての展開はみられず、１つの教育的実存論からする教育目的論の基礎にとどまっているところに、バルトの人間形成論の限界がある。

Ⅴ　バルト思想の課題

１）信仰と人間形成の問題

バルトは、『教会教義学』を貫く主題として、「神はご自身を主として啓示し給う」「聖書が証しするイエス・キリストが神の啓示である」と言う時、かれが生きた時代もそうであり、今日の時代でもそうであるが、信仰と人間形成の問題として、聖書の言葉の意味、証しするとは何か、救い主としてのイエス、現代人にとって神とは何か、啓示とは何かなどについて、絶えず自ら問い、正しく理解することが重要である。

金欲主義、世俗主義、利己主義の潮流にどっぷりとつかり、乾いたスポンジが水を吸収するように注入されている状況の中で、バルトの主張を思いかえし、その意味するところを理解していくことは、困難ではあるが重要な課題である。

２）民主主義の理解

アメリカの宗教哲学者パウル・ティリッヒ（Paul Tillich,1886—1965）は、1959年の著書『文化の神学』（Theology of Culture）[4] の中で、カール・バルトの神学について、

アメリカ神学と対比して論じているが、その中心主張は次のとおりである。

ヨーロッパのプロテスタンティズムの指導的神学者カール・バルトは、宗教社会主義者として出発し、1920年代の初期の政治的神学に対立して、ローマ書の講解を書いたが、ヒトラーの教会攻撃によって再び宗教社会主義に余儀なく入れられ、さらに東西両陣営の闘争に関しては、全く分離した態度に戻ってしまった。このような振動が、社会倫理に関して、ヨーロッパのプロテスタンティズムが持っている困難さを表わしている。

アメリカ神学では、愛の絶対的原理と常に変化する具体的状況との間に、両者間を媒介する中間的原理があることを発見した。この原理は、民主主義、人間の尊厳性、法における自由などである。これらは究極的原理と具体的状況との間を媒介する。この考えは、キリスト教のメッセージが、ある特定の政治的問題と同一視されることを防いでいる。しかし他面では、この考えは、キリスト教が人間の歴史的実存の持つ具体的な問題から離れることのできないものたらしめている。このように、アメリカ神学は、キリスト教社会倫理に対して、新しいアプローチを創造し、キリスト教のメッセージを、神と個人に対するのみならず、神と世界との関係に対しても適切なものたらしめた。……ヨーロッパ神学の危険は水平面的具体化が欠けている点であり、アメリカ神学の危険は垂直面の深さが欠けている点である。

このように、ヨーロッパ神学の代表者としてのバルトを、ティリッヒは批判し、文化や社会への水平面的具体化が欠けていることを指摘している。

3）啓示の光に照らして

バルトは75歳の時、1962年春、4月下旬から5月半ばにかけて、短期間アメリカを訪問した。プリンストン大学神学大学院の150周年記念での講義とシカゴ大学神学大学院で「バルト主義と福音主義神学の意義」について講義を行った。バルトは、一般紙上でも歓迎の声をもって迎えられた。1962年4月20日付の週刊誌『タイム』の表紙に顔写真が載せられ、宗教欄にバルトの思想やエピソードの紹介がなされている。その中のスイス軍兵士としてのバルトの写真が印象的である。私はたまたま、ハーバード大学へ、招致研究員として招かれ、滞在中の出来事であったので、アメリカのジャーナリスの反響に関心をもった。「ニューヨーク・タイムズ」は、4月29日、30日の紙面で、プリンストン大学でのバルトの講義の紹介をしている。週刊誌『タイム』はバルトの『教会教義学』の偉大な著作、福音主義神学に対して讃辞を呈しているが、おわりの方で、共産主義に対して静かな反応しか、バルトが示していないことを批判している。

バルトは、1948年の神学者エミール・ブルンナー（Emile Brunner）との論争で、かれの共産主義観を述べているが、共産主義がまちがっていることについて、欧米の人々はよく知っており、今さら教会でとりあげるまでもないこと、原則的な立場から、思想を云々

する必要はないということ、言うべき時が来れば言わねばならないという姿勢をもっていた。[5] しかし社会の問題については、神の啓示の光に照らして、信仰的決断が求められるところでは、キリスト者としての社会的行為が決定されるという見解もある。[6]

バルトのナチスに対する態度をなまぬるいとして批判した者に、アメリカの神学者ラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr 1892—1971）がいる。歴史を生きる上で不可欠な相対的善悪——ナチスの悪魔的性格——の識別に十分取りくんでこなかったところに、バルト神学の根本的欠陥が潜んでいると、ニーバーは考えていた。ニーバー自身、人間として罪の汚れを自覚しつつ、神の摂理の貧しき器として生きようとする態度を維持してきた。しかし政治的発言への傾斜を強くしていたことに対して、政治力学への埋没であるとか、聖書の神と国益の神とを無理矢理に結びつけようとする危険な読みだという批判もでてきた。しかし1943年に活字になった「平安の祈り」は歴史の瞬昧さの中で、キリスト者として生きるニーバーの信仰の告白であったと言える。「神よ、願わくは、変えることのできるものについては、それを変えるだけの勇気が与えられんことを。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静が与えられんことを。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵が与えられんことを。」[7]

この祈りには、人を動かす信仰が表明されている。かれのいう知恵が何かを十分に考え、その望ましいありかたを信仰の面からも追求する必要がある。

1961年の秋学期だったが、私はハーバード大学で、ニーバーの「民主主義と共産主義」の講義を聴講したことがあるが、病後のかれの講義の語りくちが、分りにくかったことをさしひいても、民主主義とは何かについての解釈が瞬昧であったように思われた。それは、ジョン・デューイの民主主義理論と比べてそう考えたからだと思われる。神学が民主主義を支持するイデオロギーとして利用される危険が感ぜられた。「民主主義と共産主義」という魅力あるテーマであったが、300人いた受講生が激減していった理由は、よく分らない。人間の内面に潜む自己絶対化を、ニーバー以上に警告したのは、バルトであったことを想起したい。

以上、バルトの思想について、限られた領域であったが、その課題を考察した。これからの人間形成と信仰との関わりを考える場合、多くの応用問題がでてくると思われるので、信仰と人間形成についてさらに研究を深めていく必要があることを教えられたように思われる。言語を絶したイエス・キリストの現実から聞えてくる永遠の声を、バルトは次のように言った。「わたしはあなたがたのためにあり、あたしはあなたがたの友である」と。この要約を、バルトの後継者の一人と考えられているH・ゴルヴィツアーは、バルトの追悼の辞で述べているが、要領を得たまとめということができる[8]。

－注－

1）田浦武雄著『デューイとその時代』玉川大学出版部、1984年。

2）カール・バルト、井上良雄・吉永正義訳「福音と教養」『カール・バルト著作集５』新教出版社、1986年、247～270頁。

3）バルト著　村上伸訳『キリスト教倫理Ⅲ』新教出版社、1964年、221～285頁。

4）パウル・テイリッヒ著、茂洋訳『文化の神学』新教出版社、1969年、230～232頁。

5）『バルトとニーバーの論争』有賀鉄太郎・阿部正雄訳、弘文堂（アテネ文庫）1951年、14頁。

6）同上　13～16頁。

7）鈴木有郷著『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』新教出版社、1998年、138～139頁。

8）ヘルムート・ゴルヴィツアー「インマヌエル――カール・バルト追悼」『福音と世界』1969年５月号〝特集カール・バルト追悼〟156頁。